

『ずっと友達だよ』

*
*

ありていに言えば四条アリスは立花クララ（アリスとは全く正反対の人間であるクララは非常に饒舌で活発。友達の数も多く、女子からも一目置かれる可愛い子だ）に対して怒っていたのだ。それは中学生らしい思春期的な、ちっぽけで、打ち止め用の無い怒りであった。どうしてそんな怒りを抱くことになったのかと言えば——それが思い出しただけでも胸のあたりからモヤモヤしたものが爆発し、血液を通して体中に広がっていき、勝手に頬が膨らむを感じる。つまりは、アリス自信もどうしてクララに対して怒りを抱いているのか良くわからないのであった。これといった原因が無い。それがそもその原因なのかもしれない。ただ、漠然とアリスの心の中はスカスカなフラクタル構造になってしまっただかのような感情を抱いているという事実だけが深淵の底に沈殿しているのだった。それはまさしく日常をゆっくりと蝕んでいく、純粹な怒りだった。

アリスは気がつくとき、不思議な場所に立っていた。

「……あれ、ここは——」

どこだろう、と首をかしげながら小さく呟く。

視界に入ってくる黒板、机、椅子、教卓、窓、それらを一目すればそこが教室だということは簡単に理解出来た。しかし、そこには色が全くといっていいほど無かったのだ。まるで誰かの眼を通して世界を覗いているかのように。

白と黒だけで構成された世界——教室は文字通りモノクロで、きつと、白黒テレビの中の世界に入ったらこうなるんじゃないだろうか、とアリスは考えながら窓の外を見た。

窓、奥の世界には同じくしてモノクロの光景が広がっている。けれど、その光景は教室のように普通ではなかった。モノクロの時点で普通ではないのだが、それはまだ日常の延長線にあるような光景なのだ。

奥の世界は一言で言えば闇だ。真っ暗な空間がまるで生き物であるかのように蠢き、そして踊っている。その中を白い色をしたビルや、電柱、様々な家々が泳いでいた。ぶかぶかと、ゆらゆらと、迷子のように世界の欠片のように、だ。

そんな異常事態にも関わらず、アリスは冷静だった。一度も見たことのない異様な光景なのだが、不思議とそれらは幾度となく見てきたものに見えたのだ。

アリスは、右足を一步動かし、教室の床を踏んだ。その際に見えた自分の体は色素を持ったままだということに気づいた。

瞬間。

視界に一筋の線が走った。

頬をかすめかけた線は色素を持っていない無色透明なため、すぐに消えた。

アリスの眼の前には、アリスがいた。

「わたし？」

いや、目の前のアリスはアリスではなかった。ただアリスの形をした何かだった。色素を持っていないアリスだ。

無色のアリスは手元を形容しがたく振動させ、鋭利な、凶器のようなものへと変える。そしてそれを、アリスに向けて突き走らせた。

自然とアリスはその攻撃を避けていた。まるで体が覚えていているような感覚だった。

気がつくともアリスの手には名状しがたい刀のようなものが握られていた。

気がつくともアリスは、それを無色のアリスに向けて線を作り上げていた。

キンツとモノクロの教室に音が響く。どうやら無色のアリスはその線を弾いて交わしたようだ。

……体が覚えてる？

体が戦えと言っているのだ。アリスは非日常の世界にいなながらも至極冷静で、この目の前の自分を倒さなければならぬと理解していた。自然に刀を握る手に力がこもる、その時。

アリスはたくさんの机と椅子を巻き込みながら廊下側へと吹き飛ばされた。痛みは無かった。

……このっ！

瞬時に状況を理解し、慌てて立ち上がったアリスは刀を構え、無色のアリスへと切りつける。弾かれる。金属音がこだまする。無色のアリスから攻撃がくる。それを弾く。再び金属音が鳴る。

アリスは忙しなく動かす腕から意識をフェードアウトさせ、

「なんなの、もうっ……っ！」

怒りに似た声を上げた。普段は静かな怒りを溜めるだけであったアリスの口から大きな声が出ることはとても珍しい。アリス自信は自分でも驚いた。きっとこんな世界だからだ、と思い、

……なんなの、もうっ……っ！

再び心の中で叫んだ。

そして理解する。いや、理解していた。

今どうして、このような状況になっているのかも、どうしてアリスが怒りを覚えているのかも、どうして自分と対峙しているのかも。

なんとなく、理解していた。本当はただ、認めたくなかっただけであった。

「あっ……っ！」

ガキン、と鈍い音が教室中に反響して、続く——刀が床に刺さる音が残響する。

そして。

自分自身の攻撃が、やってくる。

はずだった。

世界は砕け散った。

弾けた世界は徐々に色素に染まり、水色と、白だけの淡い夢のような空間へと、ゆっくりと、水の波紋のように広がっていく。まるで泉の中にも投げ込まれたかのような、中にふわふわと浮く感覚だった。先ほどの世界とは比べ物にならないほどの気持ちよさだ。だけど、それらは同じ世界だった。

……ああ。

アリスは、心のどこかで向かい合ったのだ。己自身と——自らの怒りと、闇と、その心と。

故にアリスは深淵の世界から解放された。ただそれだけのことだった。

「クララっ！」

早朝の学校の校庭でアリスは叫んだ。幾メートルか先を静かに歩いていたクララは驚き振りむいて、目を大きくした。校庭には登校中のたくさんの生徒がおり、それらの目がアリスとクララに向けられた。けれど、アリスは気にせず、

「……ごめんなさいっ！」

言えた。

普段は言えない言葉も、羞恥ごと一緒にぶつけることが出来た。

アリスは晴れた心の中を撫でるように空を仰ぎみる。

まるで空は、アリスたちを待っていたかのように済んだ青だった。